



『本居宣長「もののあはれを知る」をめぐって(黒田 真)』から
「もののあはれを知る」を現代に生かす

松山 隆幸

NPO法人日本モノづくり学会
(株)ティ・シー・クリエーション 代表取締役

黒住 真氏のプロフィール

黒住 真 東京大学総合文化研究科 教授 (日本思想史・比較思想宗教・倫理学)

▼経歴

東京大学文学部助手、東京理科大学専任講師などを経て、
1994年 東京大学教養学部助教授、1996年から現職。

▼コンセプト

日本においては、様々な文化が入り込んで蓄積され、また流れ出している。
その文化のうち、とくに思想・宗教について捉える。思想家・宗教者たちの、
人の生活や神仏の習合形態についての把握とその変化をたどる。
それは、どうだったのか(歴史)、どうなのか(状態)、どうなるといいのか(倫理・方向)。
最近はその背景となった神道について関心をもつ。そこには国家化された状態、
またそれ以前の民俗的な状態がある。そのあたりをもとらえ、今後の方向を考えたい。

▼主要著作

『思想の身体 徳の巻』(共著、春秋社、2007.3)

『複数性の日本思想』(単著、ペリカン社、2006.2)、

『近世日本社会と儒教』(単著、ペリカン社、2003.4)など

黒住 真氏の問題意識

現代人の「主体」感覚の在り方が問題である。「自分」が「聖なるもの」「聖人」などと関わって生きているということ、自分を越えたような何かがあり、そこに自分達が在る・生きている・動いていること、このこと・ものを、かつて人は感じながら生きていたようだ。しかし、現代人はその在り方を解体し続けている。(p142)

現代における「もの」をみってみる。すると、学問・科学にしても医療にしても、現代人は、(生命・アニマというより)「唯物論」にはまっている人間ではないか。「もの」をむしろ決まった物体と情報の感覚でばかり捉えて、組織づくり秩序づくりをし、それが自他や物の意識にさえなる傾向がある。(p140)

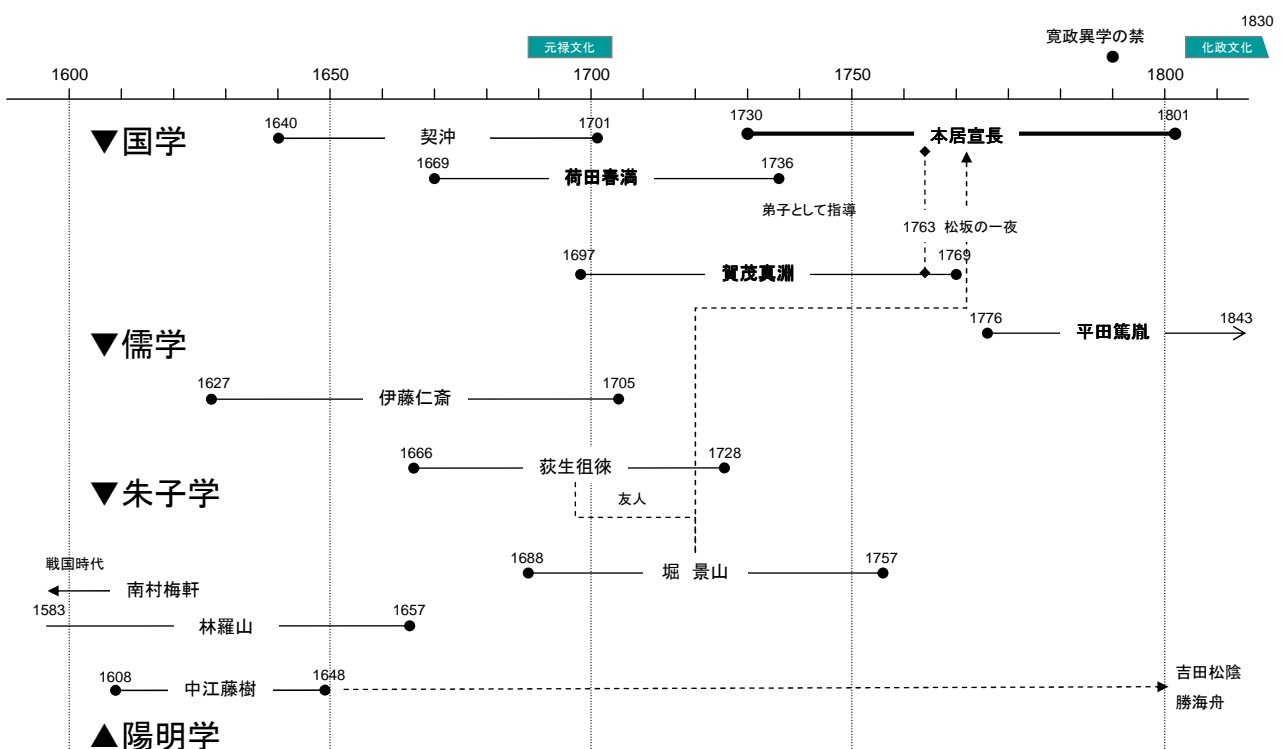
少なくとも今後20世紀末以降の人間は、物(もの)と心を、物(もの)と物(もの)を、もっとまともな形で結合してして活かなければならない。(p140)

本居宣長は、「物(もの)」をその「産霊(むすび)」の動きを重視し、これを単に人間化・人為化できない、畏敬する物として捉えた。その「ものの思想」をアニマ、アニミズムということもできるが、自然や存在・存在者つまり、「もの」を根本的に不可測なものとして捉えた。「もの」の「あわれ」も根本的には不可測な「もの」についてであり、宣長の不可測において「聖なるもの」は「あはれ」は「在った」また「知られた」のである。そこには、きっとアニマたる「もの」の「縁」があり、その「存在」があり、価値をもった「意味」があるのだろう。(p140)

いまこそ、我々は宣長がもつ「もの」の意味をもっと見出すべきである。

2

本居宣長をめぐる時代背景

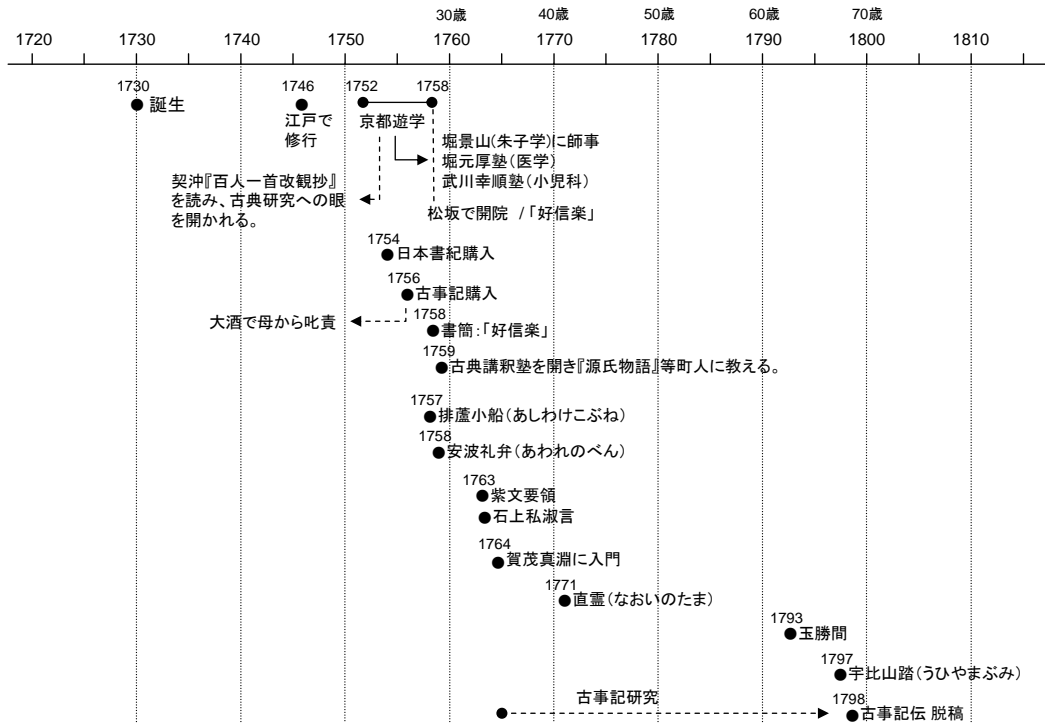


3

		経歴
国学	○契沖	<ul style="list-style-type: none"> ・真言宗僧侶・国学者 ・仮名遣い研究で優れた業績を残した。 ・「万葉代匠記」「厚顔抄」etc
	荷田春満	<ul style="list-style-type: none"> ・父親が神官 ・復古神道を提唱 ・万葉集/古事記/日本書紀研究の基礎を築く。 ・古典/国史を研究して「古道論」
	○賀茂真淵	<ul style="list-style-type: none"> ・父親が神官 ・荷田春満に師事 ・万葉集などの古典研究を通じて古代日本人の精神を研究 ・和歌における古風の尊重、万葉主義を主張して和歌の革新に貢献 ・「冠辞考」「万葉集問目」etc
	平田篤胤	<ul style="list-style-type: none"> ・復古神道(古道学)の大成者 ・儒教・仏教と習合した神道を批判し、その思想は水戸学同様尊皇攘夷の支柱となり、倒幕後の明治維新変革期の原動力になった。 ・神や異界の存在に大きな興味を示し、死後の魂の行方と救済をその学説の中心に据えた。
儒学	伊藤仁斎	<ul style="list-style-type: none"> ・古義学を提唱 ・朱子学的經典解釈を否定 ・「理」よりも「情」。理屈よりも心情を信頼する。 ・四端の心、性善説を唱える
	○荻生徂徠	<ul style="list-style-type: none"> ・朱子学を「臆測にもとづく虚妄の説に過ぎない」と批判 ・中国古典を読み解く方法論として「古文辞学」を提唱 ・徳川吉宗(8代)の政治アドバイザー。「政談」。のちの経世思想につながる ・日本橋茅場町に私塾・籙園(けんえん)塾を開く

		経歴
朱子学 南宋の朱熹(1130~1200)によって再構築された儒教の新しい学問体系。宇宙は原理と運動の二つからなる理気二元論を提唱。朝鮮の官学。鎌倉時代日本に伝わり、江戸幕府の正学となる。	堀景山	<ul style="list-style-type: none"> ・朱子学者・医師。本居宣長の師匠。 ・荻生徂徠と交友。宣長に「冠辞考」を伝える。 ・契沖の『百人一首改観抄』を刊行。 ・「不尽言」
	林羅山	<ul style="list-style-type: none"> ・朱子学者 ・23歳で徳川家康のアドバイザーになる。3代將軍・家光まで使える。 ・武家諸法度を起草。 ・儒学・神道以外の全てを排し、朱子学の発展、儒学の官学化に貢献。 ・上下定分の理を説いて士農工商の身分制度を正当化。
陽明学 王陽明(1492-1529)がおこした儒教の一派で、朱子学を批判的に継承し、学問のみによって理に到達することはできないとして、仕事や日常生活の中での実践を通して心に理をもとめる実践儒学。	中江藤樹	<ul style="list-style-type: none"> ・陽明学者 ・格物致知論を究明。 ・身分の上下をこえた平等思想を唱える。 ・武士だけでなく商人まで広く支持され「近江聖人」と呼ばれた。

本居宣長の経歴



6

本居宣長の学問に対する態度

好信楽(こうしんらく)

友人・上柳敬基へ宛てた手紙の中に「好信楽」という言葉が出てくる。

「不佞(ふねい)の仏氏の言に於けるや、これを好しこれを信じこれを楽しむ。
 畜(タダ)に仏氏の言にしてこれを好し信じ楽しむのみにあらず、
 儒墨老莊諸子百家の言もまたこれを好し信じ楽しむ。
 畜(タダ)に儒墨老莊諸子百家の言にしてこれを好み信じ楽しむのみにあらず。
 凡百の雑技歌舞燕遊、及び山川草木禽獸虫魚風雲雨雪日月星辰、宇宙の有る所、
 適(ユ)くとして好み信じ楽しまざるは無し、天地万物、皆な吾が賞楽の具なるのみ」
 (宝暦7年3月頃、上柳敬基宛書簡)

▼南方熊楠の書簡との比較

「宇宙万有は無尽なり。ただし人すでに心あり。心ある以上は心の能うだけの楽しみを宇宙より取る。
 宇宙の幾分を化しておのれの心の楽しみとす。これを智と称することかと思う」
 (明治36年6月30日付、南方熊楠差出、土宜法竜宛書簡)

万物の存在する世界から、自らが選んだ「学問」、それに確信を持ち、そこに楽しみを見出す。

(出典：本居宣長記念館ホームページより)

7

▼荒木氏の立場

言語は特定民族の文化、あるいは価値体系、世界観、宇宙観などと深く関わっている。

言葉は何よりも人間であることの本質とかかわっている。そして日本語あるいは「やまとことば」は、日本人が日本人であることの本質と、その根源的なところで深く、深く関わり合っている。(序)

日本語は日本人のイデー(理念)としての心のあり方、すなわち、その価値体系、世界観などを強烈に投影しながら形成されてきたし、また同時に、日本人の価値体系、世界観などの在り方を創造的に規定し、つくり上げることに関わってきたのである。(序)

日本人が西欧的価値体系のまっただ中に、ただひとり投げ出されたとき、「日本人」とは何かの問題に運命的に逢着せざるを得ないように、インド・ヨーロッパ語とのぶつかり合いのなかでわれわれは、日本文化とは、日本語とは、というアイデンティティの問題に激しく立ち向かうことを常に要請されるのである。その意味で、日本人にとっての、日本語と文化の問題は、西欧人のそれに比較するならば、はるかに真剣に、遙かに深く、言葉と文化の根源への問いかけをもったものでなければならない。(P200)

本居宣長も荒木氏と同じ立場だったのかもしれない。(松山)

今あらためて、日本とは何かを問い直さなければならなくなった。

どこに問いかければよいのか。じつは、どこでもない、「われらの内なる日本」を問い直すときだと考える。

(中略)

日本語の乱れ、揺れ、が危機感をもって叫ばれている。それは、世界が激しく動いていること、また私たちが、日本人とは何か、日本文化とは何かを、あらためて必死で問い直している証でもある。

(『日本文化のキーワード』栗田 勇)

▼「さだめ」と共同体の論理

日本人にとって、「共同体(集団)の論理」も、前世からの「宿命」も、それが神の意志によって定められた道である限り、いずれも個人の意思をもってしては動かすことのできない絶対的要請として、決して別物であることはなかった。それを日本人は「さだめ」というひとつ言葉で読んだのであるが、日本人はそれに加えて、「共同体(集団)の論理や「宿命」だけでなく、さらに広義の不動の原理をも指示するきわめて重要な表現を持っていた。それは「もの」という言葉である。「もの」は、神の論理としての共同体(集団)の論理だけでなく、人間の存在を貫いてある恒常不変の原理(さだめ)、さらには超自然的存在物(聖・非聖)、あるいは時間的に恒常不変のものとしてとらえることのできる具象物、までを広く指示する言葉である。(P.86)

▼原理をさす「もの」

日本人の内部には、常にその本質において共同体の論理と重なり合うような、不変の原理が、行動のノルムとして存在している。日本人の行為、あるいは判断の選択は、常にこういった恒常原理、ノルムに依拠しつつ行われるという日本的独自性になっているのである。

(中略)

「もの」は……日本人が心の深奥に共通に分ち持っている行動の規範としてのノルム、原理を暗示的に指示しているといつてよいのである。

(例)

女です“もの”一度は花嫁衣裳を来てみたいわねえ。

“もの”は女としての日本的あり方というものが原理として

日本女性の中にあって(日本的家族制度、30までには結婚したい! etc)、

その原理にコミットしている心を込めている。

▼「ものいう」「ものおもう」

古代の日本人は同じ「もの」ということばによって、恒常的・不変的・運命的原理をも、具象的な物体をも矛盾なく指示してきた。

○世の中は 空しきものと知る時し いよいよますます 悲しかりけり (『万葉集』巻五 793)

○紅は 移ろふものそ つるはみの 馴れにし衣(きぬ)に なほ若(し)かめやも (『万葉集』巻十八 4109)
くれないはうつろいやすいものだ、どんぐりで染めた着馴れた着物にやはりおよばないだろう

○雁(かり)が音の 寒き朝明(あさけ)の露ならし 春日の山を 黄葉(もみじ)たすものは (『万葉集』巻十 2181)
春日の山を紅葉させたのは雁の音が冷たく聞こえる夜明けの露らしい

○まそ鏡(かがみ) かけて偲(しぬ)へとまつり出す 形見の物を人に示すな (『万葉集』巻十五 3765)
心にかけて偲んでおくれと差し出す形見のものを、他人に見せるではないよ

○賢(さか)しみにと 物いふよりは 酒飲みて 酔泣きするし まさりたるらし (『万葉集』巻三 341) 大伴旅人
賢ぶって物を言うよりは酒を飲んで酔って泣くことのほうがまさっているようだ

○旅にして 物思ふ時に 霍(ほと)とぎすもととな鳴きそ 我が恋増さる (『万葉集』巻十五 3781)
旅の空で物思いをしているときに、ほととぎすよ むやみに鳴くな、私の恋がつのるではないか

10

▼「もののあわれ」

日本国語大辞典

- (1) 人の心を、同情をもって十分に理解できること
- (2) 物事にふれて起こるしみじみとした回顧の感慨
- (3) 物事や季節などによってよび起こされる、しみじみとした情趣
- (4) 何かに深くかんとどうすることのできる感じやすい心
- (5) 悲哀や同情を感じさせるような気の毒なさ



「もの」すなわち「人間を、あるいは人間の存在を貫いてある恒常不変の原理、さだめ」にふれて起こる**感慨、情感**

春はただ 花のひとへに咲くばかり 物のあはれは 秋ぞまされる 『拾遺集』(1006頃)

うつろい、やがて滅びゆくものへの痛いほどの情感を示す。
「物」は原理であるとともにさだめでもある。

▼「もの」の属性

原理 法則 不変 運命 不可避 支配 権威 超自然的存在(聖・非聖) 永続的存在物 具象物 非選択 etc

○世間のあり方、道理

ものの道理のわかった人
ものわがりのいい人
もの心つく

ものいい → 原理原則に従って異議を唱える
英語をものにする → 自分の支配・法則の中に組み入れる

▼超自然的な「もの」

「京にも、この雨風、いとあやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞えはべりし....
神の論理に基づく教え

11

▼「あわれ」とは

○国語大辞典

「うれしいにつけ、楽しいにつけ、悲しいにつけて、心の底から自然に出てくる感動の言葉」

○古語辞典（岩波書店）

「事柄を傍らで見て讚嘆・喜びの気持ちを表す際に発する声」

「それが相手や事柄に対する、自分の愛情の気持ちを表すようになり、

平安時代以降は、多く悲しみやしみじみした情感、あるいは仏の慈悲を表す」

- 私にとって「あわれ」という言葉から浮かんでくるのは、ぼんやりとすわって、雨の音を聞いていても、風の吹く音を感じていても、深い共感に全身が共鳴するといった体験である。超越者との交感、ふれあいの身ぶるいするような深い感動である。(P.181)
- 言ってしまうと、自他の区別、自然と人間の区別をはっきりさせないまま、「あわれ」と心を動かす。(中略) いずれにしても、自分の内部から沸き上がってくる、押えきれない感動があるということである。
- 言葉になる前の強い気持ちの動き、身体的な情動が言葉になる前の悲嘆、讚嘆、願望、すべてに共通するというのではないだろうか。(P.185)
- 「あわれ」は、たんに人と人、また個人の情感の表れだけでなく、人間と自然との関係、さらには大自然の仕組み、宿命について、それを超えた神や仏といったある絶対的で宗教的な対象を前にしたときの、声が発せられる寸前の感動、これらすべてに通じる気分を「あわれ」と言っている。(P.188)

もの＝原理、法則、不変性：目に見えないものごとの背景にある真実

こと＝物質性、現象性、一回性、非原則：目に見えた事実、現れたもの、目の前で起こった現象

▼「もののあわれ」とは

- 目に見えない、かたちをなさない、しかしその背景に隠された強い感動をいうらしい

- 何よりも古代では男と女の人間関係

- 「木の葉の音 おとなひにつけても 過ぎにしものあはれ 取りかえしつ つ その折折」(『源氏物語』)

- 「もの」

- 「もののじょうず」: 音楽、詩歌など芸能の技能

- 「ものもうで」: 神社、仏閣のみ魂にお詣りすること

- 人間と人間との間で、目にめないもつとも強い感動が、男女の間で交わす情であるとしたならば、日本人の場合さらに、人間と人間とを取り巻くもの、つまり自然と人間との間の関係も、さらに重要な「もののあわれ」であろう。(P.197)

- 広い天然宇宙の生命と共感に根ざした、おおいなる生命力に目覚めた心境が「もののあわれ」ということになるといってもいい。(P.198)

▼本居宣長の真意

- 敷島の やまごころを 人間はば 朝日ににほふ 山桜花

- 自然には四季の巡りがあり、また一日の巡りがある。そんなことを思わせる春の山桜に朝日がさしている。そのとき、いまという時の中にあり、しまもいま一瞬の緊張のなかに目覚めている、そのような自分を自分で意識すらしない、そうした充実した生命感がみなぎっている。

- 本居宣長は「大和心」「大和魂」と呼んだ。

- 日本人が利害打算を離れて、深い感動に打たれたときに、分析的な思考以前の、根源的な存在を揺さぶられたときに発する叫びが、「あわれ」という言葉になる。

- (中略) 元来、日本人のものの考え方の持ちようは、分析よりもトータルに捉えようとするところにある。

▼「ものあわれ」とは

- 中国人は、言挙する。分析的に論理づけて道理、倫理をあげつらう。しかし、そのために言葉にならない本当に大切なものを見失っているのではないか。
- 「実は道あるが故に道てふ言なく、道てふ言なれど、道ありしありけり」（直毘靈：なおいのたま）
- 中国思想の軸は道教だ。しかし中国では、その道がもはや見失われている。だからこそ、あれほど道、道と言挙して言うのだ。一方、日本はおのずからなるものがあるから、道と言わなくても道が自ずからにして生きているのだ。
- 学問として道を知らむとならば、まず唐心をきよく除き去るべし（玉勝間）
- 「大方人は、いかに賢しきも、心の奥を尋ねれば、女童などにもことに異ならず。すべて物はかなく女々しきところ多きもの」（石上私淑言 巻二）
- 「されどももの理（ことわり）というものは、すべて低意もなくあやしきものにて、さらに人の心もてうかがひはかるべきものにあらねば、しひて明らめん知らんともせず、万（よろず）のことはただ神の御はからひにうち任せて、己が賢しらをつゆまじへぬぞ、神の御国の心ばへにはありける。」（石上私淑言（いしのかみささめごと） 巻三）
- もともと人間の知には限りがあるし、言葉で表せるものは限られている。
- しかし、言葉にならないことは理論ではないと西欧人は考えた。だからあわかるところまでギリギリ、ギリギリ理屈を推し進めていく。そして最後のわからないところを切り捨てる。（中略）わかったところまでは人間の世界だ、そこから先は神の世界だとしている。
- 日本人はあきらめない。（中略）われわれは自然という神の中にいるし、自然の一部分なのだから。だからkと場でもわかり合える共感する世界がるはずである。そのところに本音があるのではないか。
- 「非思量底を思量せよ」（道元）：論理的に分析できないところにこそ悟りがある
- だから日本では、「面授」「口伝」により言葉にならないものは共通体験をすることを大切にしてきた。

本居宣長の思想史から「ものあわれを知る」

本居宣長「ものあわれ」を知るをめぐって / 『モノ学の冒険』（創元社）2010]

本居宣長の思想的に記録された作品から彼の「ものあわれを知る」流れを知り、今にどのように生きるのかを考えてみる。

▼「排蘆小船(あしわけこぶね)」

1. 「歌の本体、政治をたすくためにあらず。身をおさむるにあらず。ただ心に思ふことをいふよりなし。」
2. 「そのうちに政のたすけとなる歌もあるべし。身のいましめとなる歌もあるべし。また国家の害ともなるべし。（歌の用）」
3. 歌の本質は、ただ自分の心・気持ちをいうこと。
4. 修身、治国、善悪などは「後から生じる」。それ以前のもの、それ以前に人の心に存在し続ける感性がそれ自体のものとしてあり、その表現が歌である。
5. 感性的美こそが、理知よりも本体だ……。 「物のあはれを感じる処が第一なる」
6. 歌道によって、心内の状態は塵芥がはらわれるように、いわば浄化される。
7. 歌の「ものあわれ」を感じることは、「誰もがどんな存在者もが」結局響き合っている・もつものものである。その「もの」の表現こそが、歌の感性、その本質、状態だ。（P. 147 / 黒田）
8. 心・気持ち・感情は、ただ個人的な内面だけでない。それは自ら持つことによって、自分だけでなく、他にも繋がっている。その響き合いの感覚を、かつて人々はかなり持っていたようだ。（中略）内面が響きあい、ある種普遍的なものに繋がるという感覚（動植物だけでなく人間にも）あったのだろう。（P. 147 / 黒田）
9. 朱子学を受け止めた韓国では、むしろ理の方をより強調して原理化・理想化が行われ、それが秩序づくりにも働いた。ところが、近世日本では細かな理はたくさんあるが、大きな理はなくなっていく。（P. 147 / 黒田）

▼「安波礼弁」

「歌道はあはれの一言」

▼「紫文要領」 源氏物語論

1. 「世の中にありとしある事のさまざまを、目に見るにつけ耳に聞くにつけ、身に触るるにつけて、その万の事を心に味へて、その万の事の心をわが心にわきまへ知る、これ、事の心を知るなり、物の心をしるなり、物の衰れを知るなり。
2. 「大方人の実（まこと）の情（こころ）といふものは、女童のごとく未練に愚かなるものなり。男らしくきつとして賢きは、実の情にはあらず。」
3. 「実の心の底をさぐりてみれば、いかほど賢き人もみな 女童にかわることなし」
4. 「うはべをつくろひ飾りたるもの それを恥ぢてつつむとつつまぬとの違ひめばかりなり」
恥から表面を作り飾った本心を包んだだけである。
5. 主情主義、感性主義。感情の働きを人間の実質として肯定する。（P. 149 / 黒田）
6. 「物の衰れを知るは、一方には限らず。折にふれ事によりては、此の方も彼方も忍びがたく衰れなることもあるべければ、一偏にはいひがたし」
7. あはれは共感としていわば多方向・多方面に広がっている（P. 150 / 黒田）
8. 宣長にとって、「もののあはれを知る」は、他者があり状態があつての共感である。（P. 151 / 黒田）
9. 「その人の心になりて見る時は、いまひときは物の衰れも深きものなり。」

16

▼「石上私淑言（いしかみかさめごと）」 古今和歌集をとらえた歌論

- 「歌」を「生物」すべての声、心、情だ という。
鳥が鳴いたり、蛙が鳴いたりするのもすべて「歌」だという。
生き物すべてが歌を詠っている。
- 「その中でも、人はこと万の物よりすぐれて心もあきらかなれば、
思ふ事もしげく深し。其上は、禽獣よりも**ことわざ**のしげき物にて、
事にふる事多ければ、いよいよおもふ事多き也。
されば人は歌なくてかなはぬことわり也。」（上一巻）（P153）
- 「物のあはれを知る」からこそ、その思いの深さがある。
「その思ふ事のしげく深きは何ゆゑぞといへば、物のあはれをしる也。」
- その後 約35年に渡り、古事記のテキストを訴求していく。→古事記伝
- 宣長は、理知の動きを抑え、人の心とそれが捉えるものは不可測なのだといひ、その霊威なものとの関係を強調する。
- 学者は、ただ道を尋ねて明らめ知るをこそ、つとめとすべけれ、私に道を行ふべきいものにはあらず。
されば、随分に、古の道を考へ明らめて、その旨を、人にも教えさとし、物にも書き遺すおきて、
たとひ五百年千年の後にもあれ、時至りて、上にこれを用ひ行ひ給ひて、天下に敷き施し給はん世を待つべし。
これ宣長が志なり。

<<ヌミノーゼとは>>聖なるものへの畏怖の感情

17

▼「もののあわれを知る」を現在に生かすには？

「もののあはれを知る」は、他者があり状態があつての共感であり、誰もがどんな存在者もが結局響き合っている。
 理知中心の社会において、改めて内面的感性にアプローチして、異と交わり、他者と繋がるのが今求められているように感じる。
 人間と人間、あるいは人間と自然の響き合いの「間」に本質的なもの、普遍的なものが備わっているのではないか。

6月20日 朝日新聞 第3種郵便物認可

日本人の「昆虫愛」を映画にした
 Jessica Oreck
 ジェシカ・オーレックさん (25)



屈指した昆虫少女だった。緑豊かなレイジアナ州やコロラド州で育ち、幼稚園に入る前から大の虫好き。なのに、お気に入りの昆虫やへびの皮を見せると、友だちも先生も露骨に不快な顔をした。

「虫好きは米国ではすごく肩身が狭い。たれも家で虫なんか飼わないし、デパートに売り場はない。変わり者扱いされるのが嫌で、中学以降は昆虫趣味を隠しました」

日本の昆虫熱を知ったのは2006年暮れ。博物館の講座で「大昔からトンボやチョウをめでた国。今でも昆虫をハットとして飼う」と知り、脳天がしびれた。そんな夢のような国が地球上にあったんだ！

にわか仕込みの日本知識と大学で習った撮影技法を携えて、07年夏、初めて日本を訪ねた。2カ月間に日光、東京、静岡、大阪、京都、兵庫・たつのをめぐる。

ごく普通の人々がスズメシとキリギリスの羽音の違いを識別できることに驚嘆し、ホタルを悲恋の象徴と感ずる文学性にクラクラした。高級車フェラーリに乗る昆虫業者に頼み込んで採集にも同行した。

なぜ日本ではこれほど虫が愛されるのか。古事記や源氏物語まで調べてたどりついた結論は「もののあはれ」だ。「日本人々は虫たちのほかない生命に美を感じることができ。米市民にはその文化がない」

初監督作品「カプト東京」が米国で公開中だが、客足はさえない。日本で上映する方策を探っている。

文・山中季広 写真・坂本真理氏